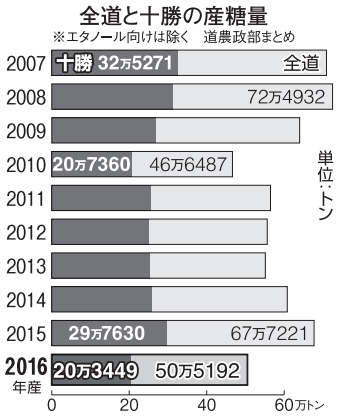
農業ガイド1112号　2017年6月24日
ビート糖生産32％減　管内2016年産

道農政部などは、2016年産ビート糖の生産実績をまとめた。日本甜菜製糖芽室製糖所、ホクレン清水製糖工場、北海道糖業本別製糖所の管内３製糖所の合計生産量は、前年比32％減の20万3449トン。昨夏の天候不順や台風の影響で、過去10年間で最少となった。

台風影響、10年間で最少



製糖所別の生産量は、日甜芽室が12万7330トン（前年比25.6％減）。糖分は16.3％。作付面積は１万4408ヘクタールで、１ヘクタール当たりの収量は56.98トンだった。

ホクレン清水の生産量は４万4481トン（28.1％減）。糖分は16.6％。作付面積は5591ヘクタールで、１ヘクタール当たりの収量は50.83トン。北糖本別の生産量は３万1638トン（同51.1％減）。

昨年の管内は６月中旬以降、日照不足と長雨が続いた上、８月には４度の台風接近、上陸に見舞われた。水はけの悪い畑では、滞水が発生してビートの腐れが発生。収穫期の11月上旬には降雪があって掘り残しも出て、収量が大きく減少した。管内３工場の原料処理量は前年から２割以上落ち、製糖期間が短くなって生産する砂糖の量も落ち込んだ。

管内全体の作付面積は２万6056ヘクタールで324ヘクタール増えた。平均糖分は16.3％で、豊作だった前年より1.3ポイント減。１ヘクタール当たりの平均収量は50.18トンで、16.55トンの大幅減となった。

全道のビート糖生産量は、同25.4％減の50万5192トンだった。十勝と並ぶ主要産地のオホーツク管内も収量が減少し、全道の生産量に響いた。

道農産振興課は「気象環境が大きく作用し、糖度はほぼ平年並みだったが、湿害などで収穫量が少なかった。今年は比較的順調に生育が進んでいるので、このまま収穫期を迎えてほしい」と期待している。

収穫量減に伴い産糖量も減った昨年のビート生産
（2016年10月、芽室町）

更別でシストセンチュウ　ＪＡが対策本部　管内８例目　2017年7月29日

【更別】ＪＡさらべつ（若園則明組合長）は28日、村内の畑の土壌から、ジャガイモの収量減をもたらす害虫「ジャガイモシストセンチュウ」が確認されたと発表した。村内で確認されたのは初めて。管内では2003年の上士幌で初確認。11年の芽室、16年の浦幌に続き、８例目となる。

同ＪＡが村内で来年ジャガイモを栽培する畑を対象に実施した土壌検査で、10日に検査した土壌サンプル中、１戸１点に発生の疑いが出た。道農業研究センターで検査した結果、26日にセンチュウと確認された。

同ＪＡは28日、若園組合長を本部長とする対策本部を設置した。村や十勝農業改良普及センター、管内の農業団体などと連携し、防除に当たる。同ＪＡは「確認した畑の周辺地域で土壌の再検診を行っている最中で、実態把握を継続している」としている。

＜ジャガイモシストセンチュウ＞

外来種で1970年代に道内で初確認された。人体への影響はないものの、ジャガイモに寄生することで養分を吸収し、収量を減らす。卵は低温や乾燥に強く、10年以上も生存できる。薬剤防除も困難で、一度侵入すると根絶が難しい害虫とされる。